



## 日本酒でお近づきに

---

「あ！」

カフェのガラス越しに手を振り、そそくさと会計に立つ笹木を横目で見ながら、望は鏡で確認して来たばかりの髪に手をやってしまう。

「お待たせしました！」

「こちらこそ」

「あの、ええと、、、。お誘いしてしまってから気付いたのですが、お夕飯のお支度とか、、、大丈夫でしたでしょうか」

望は、少しだけ凹んで苦笑した。

「一人暮らしです。ペットもいませんし」

「良かった！僕も妻に今夜は食べて帰ると連絡しましたから」

今度は、もっと凹んだ。ショックのワケを今は考えるまい。

「ご結婚されてたんですか？」

「学生結婚です。どっちも下宿だったものですから、いっそという感じで」

「それで、しっかりなさって見えるんですね」

「見えるだけでお恥ずかしいです」

「あ、そんなつもりでは、、、」

笹木は笑顔になると、あどけない程だ。

「日本料理店でよろしいですか？美味しい日本酒もあるんですよ」

「お任せします。でも、お酒はあんまり、、、」

笹木は、驚くと更に無垢な少年みたいだ。

「エッ！お強いとばかり思ったものですから」

「あはは、笹木さんのそんな顔！」

段々と楽しい気分になって来るのを止められない、、、。本当は、日本酒だって大好きだ。八海山。真澄。

でも、すぐに顔に出るからイヤ。必ず冷やかされるし、セクハラな男は、ここぞと頬に触る。首まで真っ赤だぞ！なんて、、、。どこ見てやがるんだよ！って一回位は言ってやりたいわ。

## 創作料理屋のいい女

---

「丘さん、休みの日は相変わらず家で映画？」

奈々子達は、よくこの銀座の創作料理店の座敷を使う。残業が多い社員ばかりだが、毎回15名程は参加する。奈々子は無遅刻、無欠席だが、幹事は回って来ない。女子は、麻美と望との3人だけになってしまった。最初の頃は、寿退社した女子にも声をかけていたのだが、話題がすっかり噛み合わなくなっていると互いに感じて、誘う事はなくなっただけらしい。店員達は、奈々子達に愛想が格別だが、奈々子は料理の名前や作り方は尋ねない。この料理は、だしに椎茸使ったの？面白い、、、などと一人で悦に入って手酌する。男子が注いでくれるのだが、そうすると、要らぬ笑顔が必要だ。

「ところがね、、、ボクシングにハマっちゃって」

「まさか！誰のファンなの？」

「違う、違う。やる方」

「あ、あれか！ボクササイズ！」

「ううん。トレーナーについてやってるの」

大川トリオ（奈々子が密かに命名）は、変な顔をした。惜しい3人だ。疲れた顔は見た事がない。常に床屋帰り？？？みたいなサッパリした様子をしている。駅や街で彼らに、落としましたよ！などと何か拾って貰った女の子達は、全員ドキドキするだろう。が、きっと全員が、やがてはフェイドアウトする、、、。彼らは仕事が忙しくて彼女を作る暇が無いとぼやいているが、恋は素敵な事故みたいなものだ。突然やって来る。但し、いい男といい女限定にね。

「何年経っても、丘さんは理解を超えてるよなあ、、、」

\*次回は、麻美とフッチー（望の彼氏）が登場します。乞う、ご期待！

## 沖縄料理屋のアルコール

---

「フッチー、なに飲んでるの？」

二次会の沖縄料理店で、麻美は藤野の隣に陣どって、既にしなだれかかっている。誰にでも等しく優しい藤野が嫌な顔をしていないから良いようなものの、みっともいい図ではない、、、。

「泡盛トニック。麻美は？」

「泡盛オンザビーチ！きゃはは♪」

「？」

「麻美！！！ゴメン、この子、こないだ行ったアクアバーでセックスオンザビーチってカクテル見つけて」

「頼んだんだ？」

「ムリ！」

「試してみれば良かったのに」

「奈々子とテラちゃんがイヤがるもん！」

「ごめんね」

「なんで、フッチーが謝るの？テラちゃんなんて、優等生ぶって、欲しいものは何だって手に入れてるじゃん！」

「？」

麻美、イエローカードだ。が、席が遠くてド突けない。

「あ、その日テラちゃんティファニーリング買った事よ。えっと、スペインのデザイナーのだったかな、、、」

「自分でリング買うなんて、可愛くない女！」

藤野の薄茶の目には、すぐに憂いが出てしまう。

「麻美が言いたい事は分かるよ」

テラちゃん、きっと見せてさえいないんだなあ。私も可愛くないと思うに1票。

「今頃、笹木さんに告らせてるよ！なにげにそゆ事うまいんだから！」

「酔っ払い！！！」

麻美、レッドカードに決まり。

「フッチー！奈々子がいじめるう～」

「よしよし」

頭ポンポンなんて、してやってる時？？？どこまで人がいいんだろう。

「でえへへへえ～。よ～し！二人王様ゲーム始め！」

「？」

「麻美が姫。フッチーが執事！」

「それって、王様ゲームなの？」

藤野は笑いながら、両耳の上辺りの髪をかき上げた。天然の茶髪。イケメンってより、ハンサムなんだよね～。

「執事！姫はパソコン奴隷で肩が凝っておる。肩を揉んでたもれ」

「かしこまりました。しかし、わたくしめもパソコン奴隷にてございます」

あ～あ、ホントに肩揉んでるよ、、、。これって、、、いや、見ないでおこう。

\*料理がひとつも出ませんでしたね。最近、食傷気味のせいでしょうか？

そして、次回は胸騒ぎが当たるのでしょうか???

## コンビニの日？

---

「台風、来るなあ、、、」

屋上は禁止だが、鍵はついていない。ベンチも椅子も無いせいか、誰も来ない。6階建てのビルじゃ、展望なんて無い。しかも、動物園より悪趣味な緑色の金網が相当上まで周囲を囲っている。よじ登って乗り越えて、飛び降りる事は不可能じゃない。だけど、会社のせいでノイローゼになったら、このビルから逃げる事はあっても、ここを最期の場所を選ぶ者はいない。奈々子は、向かい風を受けながら、ウーロン茶を飲んでいる。望が、コンビニの袋を提げて現れる。

「それだけ??？」

「タベ、飲み過ぎアンド食べ過ぎ」

「麻美は？」

「休んだわ」

「病欠？」

「望に会いたくないんじゃない？」

今、望って呼んだよね。麻美抜きの話の時、そうするよね？

「どうして？」

「どうせ分かる事だから言うけど、麻美、三次会のカラオケであなたの彼氏と消えたのよ」

「消えたって？」

「言葉通りよ。私が気が付いた時は二人していなくなってたのよ。麻美には何回もコールしたけど出なかったわ。皆には麻美が飲み過ぎだから彼が送ってったって言うておいたわ」

皆がどうとかって問題じゃないわ！

「猛にも電話してくれたの？」



「やめてよ。私はフッチーのママじゃないんだから。あなただって楽しんだんだからいいじゃない」

私を見下してるの？

「どういう意味？」

「だから、やめてってば。深い意味なんか無いわ。だけど、あなた、笹木さんに好意持ってたでしょ。私を誤魔化せると思わないでね」

\*望は藤野を信じたいけれど、もしもの場合、彼氏と友達に裏切られて、別の友達からも

この言われよう、、、。

望には何が自分の身に起きたか分からないでしょうね。次回、藤野から真意を聞き出せるでしょうか？

おいしいのは誰？

---

「まさかと思うけど、タベ、麻美ここに泊めた？」

望は、自分がらしくなく仁王立ちになっていると気付いていない。

「・・・・・・・・」

「麻美は私の友達なのよ？」

「誰の為に怒ってるんだ？」

「!？」

「前から思ってたけど、君にはそういうズルい所があるよ」

「話をすり替えないで！」

「泊めたよ。寝たよ」

「開き直る気？」

血が引いていくのが分かる。

「そんな人と思わなかったわ！」

「君こそ虫も殺さない顔で他の男とデート？」

「ご飯食べただけよ！一緒にしないで！それに笹木さん達は昨日で最後の日かもしれなかったのよ？」

「ほら、まただ。君は自分に都合のいい考え方するよね」

「自分がした事わかって言ってるの？」

藤野は、ゆっくり息を吐き出して、目を閉じると、今度はゆっくり吸いながら目を開いたが、その目は何も語っていない。

「君ね、、、。会社は仕事をする所だよ？社内恋愛は構わないと思う。自分達だってそうだ。だけど、君、言ったよね？社内では皆に遠慮しようって。しかも、細かい事を言って悪いけど、君からそう言ったんだよ？妬いてるみたいだから言わなかったけど、君、堂々と嬉しそうに笹木君達の世話焼いてたよね？」

血が逆流を始めて、一瞬声にならない。

「そんな言い方！！！」

「俺が周りから、放っておいていいのかって足引っ張られてたの知らないだろ」

「足を引っ張る？」

「俺達、誰から先に課長になるかって時だって気付いてないの？俺が自滅して喜ぶヤツもいるって事さ。女子は気楽でいいね」

目眩がした。

「私の仕事は仕事じゃないって事？」

「業務時に海外に私用電話するようなヤツの会社の世話の事？」

「誰だって魔がさす時はあるわ！」

「俺と麻美は？」

悔しくて殴りかかる。

「猛！！！」

「麻美は本当に酔っていて心配だったんだよ。ここの方が近いから連れて来たんだ。君を傷付けるつもりはなかった。麻美は妹分みたいなものだ。いっそ君にはシラを切ろうかと思った位だ」

男の腕力は強い。必死に殴ろうとするが届かない。それでもきつと手加減して腕を掴んでいると思うと余計に悔しい。

「触らないで！」

藤野はあっさり手を離した。

「幾ら俺でも、感情的になっている女の相手は出来ないよ」

「これ以上バカにしないで！」

過呼吸起こしてやる。気を失ってやる。が、藤野の部屋を飛び出した。

\* 藤野猛、名前負けしてませんでしたね。

望は部屋を飛び出しましたが、逃げ出したと気付いてないでしょうね。

次回、望は麻美からも逃げるのでしょうか。

## イタ飯屋で泣かないで

---

「麻美、ここで泣いたら反則だからね」

奈々子は、双方どちらにも目をやらず、野菜ソムリエの今日のパスタを黙々と食べている。二人は、手をつけていない。麻美は今にも消え入りそうだ。

「テラちゃん、、、。ごめんなさい、、、」

「説明して」

望の、いつもとトーンの違う低い声に、麻美は更にかき消えてしまいそうだ。

「私、飲み過ぎて、フッチーに甘えてて」

望からは、見えない火花のようなものがずっと麻美を打ち据え、麻美は懸命に言葉を搜していたが、突然、麻美からも小さな何かが立ち上がった。

「ううん、ごめん。ちゃんと話すね。私、テラちゃんが羨ましかったの。あんなイイ男と結婚した時も、仕事と家庭両立させてた時も、離婚の決断できたのも全部。会社に居辛くないのかなって思ったのに大丈夫だし、皆だって変わらないし。テラちゃんに、平気なの？って聞いた時、別に恥じる事したわけじゃないって言われて、私、自分の事を恥ずかしい人ねって言われた気がしたよ。フッチーは私を可愛がってくれはしたけど、選んだのはテラちゃんだった。笹木さんだって、私にだったらあんな風にしてきてないと思う。配属先が決まった時から、システム一課なんてスゴイなって思ってたの。私じゃ、神山課長に気に入って貰えるはずないもん」

麻美は、唇を震わせ、噛み締め、一気にそこまで話してやっと弱々しい笑みを望に投げた。

「麻美、、、」

麻美は、もっと瞬きしながら、もう一度微笑んだ。

「フッチーんち行ったら、テラちゃんの物が色々あった。私、持ってみたの。お茶椀とかこうやって持つの？ブラシってこうやって髪すくの？って、、、。ふざけてたんだか、テラちゃんは私とどこが違うんだらうって本気で考えてたんだか、仕返しがしたかったのか、フッチーが可哀想だったのか自分でも分からない」

限界だった。麻美は泣き出した。それは、奈々子の想定内だったのだが、またも、麻美、、、とだけ言って望が泣き出した時、そう来たか、、、と思った。でも、そうかもね。

「会計して来るわ」

\*そう来たか、、、って（笑）。泣いちゃうでしょう！？もっとキレル人もいますが（笑）。

修羅場で冷静な奈々子は、女子受けは良くないでしょうね（笑）。

藤野と麻美の言い分は出揃いました。でも、望にも言い分があるかも、、、。次回！

味気ない？ある？

---

「私の荷物、取りに来たの」

「分かった」

「少し分かってないと思うわ」

望の微笑みに、嘘はなさそうだった。

「私、自分の事しか見てなかったって気付いたの。猛、我慢してくれてたんでしょ？ありがとう。ごめんね」

大好きだった望の、首を傾げながらしゃべる癖。瞳が大きいから目立たないけど、笑うとちょっとタレ目で愛らしくなる。

「だったら、俺達、、、」

「いいえ、ごめんなさい。あった事を無かった事には出来ないわ。だけど、麻美とは大丈夫よ。心配しないでね。猛、、、フッチーもこれまで通り大事な仲間よ」

「すごく変な事を聞くけど、、、メイク変えたか何かした？」

望の、顔をくしゃっとさせる笑顔。望だ。望だ。

「急にどうしたの？変えてないし。おかしな人」

「いや、絶対に君の方が妙だよ」

「同じよ。フッチーに付き合ってくれて言われた日の事、今思い出しても嬉しかったわ。私、いつまでも私の事好きでいて欲しくって、少しは努力したのよ」

真面目な顔が、また崩れた。

「離婚したのは自分にもいけない所があったからだと思ってたしね。だけど、恐くてケンカも出来ないのって恋人らしくなかったわね」

望が遠くなる。

「俺、君に淋しい思いさせてた？」

「もう止めましょう。短い間だったけど本当にありがとう。会社では、これからもヨロシクね」

もう、微笑むな望。

\*望、今なら後戻り出来ます。どうなる、次回！？



## しょっぱいマカロン

---

「そだ、そだ、ゴミ箱の蓋の裏もやろうっと」

一人暮らしをしていると、独り言が増えるって本当だ。望は、せっせと部屋の掃除をしていた。思いつくまま、アチコチを磨く。飾ってある大型本の透明カバーの埃を払う。重曹をシンクのパイプに流す。しかし、掃除に熱中するのには、意外にすぐに飽きた。

「あ、お母さん？やだ、どうもしてないわよ。皆、変わらない？次の週末、帰るね。お土産は、またあのマカロンでいい？分かった、3箱位買ってくね」

電話を切り、アドレス帳を次々と繰っていたが、溜息をついた。涙で、文字がぼやけた。日が暮れて部屋が薄暗くなっても、望はいつまでも泣いていた。

\*ありますよね。世界中で独りぼっちな時。麻美と藤野は、今頃どうしているでしょう。

望は、このまま下降していってしまうのでしょうか？次回！

## 女子にはアイスクリーム

---

「テラちゃん、こないだの事、本当にごめんね」

「トリプル食べてる人に説得力ない！」

「使いすぎの頭には甘い物が一番なの！」

非常階段も穴場だ。ここも奈々子が見つけた。3人は、ここでよく昼食後にアイスクリームを食べる。

「気にしないで。私、実際いい気になってたんだから」

「テラちゃんは悪くないよ！」

麻美は、ゴメンじゃ済まない。普通に美味しそうに食べられる神経が分からん。悪くないよなんて言っただって、仕事のミスを励ましてるみたいなノリに聞こえる。つまり、、、自覚は薄そう。人の彼氏に手を出した汚点は消えないって、麻美にも分かっているとは思うけど。

「笹木さんとはあれからは？」

望が笑った時、奈々子は話題が変わっての安堵の笑いかと思った。

「笹木さん、奥さんいた」

「それって、やっぱりテラちゃん笹木さんの事、、、」

奈々子は、望にこれ以上傷付いて欲しくなかった。

「麻美！今更な事、聞かない！」

望は、また笑った。

「恋人募集中の人は、何か目印でも付ける事になればいいよね」

「私が募集してないってバレるじゃん」

男に割く時間は惜しい。でも、女に生まれたからには、モテないってのはなあ。奈々子は、アクセサリー代わりの長い髪を指ですいた。

\*望、また笑ってますけど、いいのでしょうか。物語は、ここで3分の2です。

まだ、望を待つものがあります。素敵な事であって欲しいところですが、人生は気まぐれ、  
、、。

## 棚からボタ餅???

---

「手羅クン、お疲れ様でした。プロジェクトが順調なので、当初の予定通り残りは我々でやる事になった。3ヶ月間、君にはきつい事も言ったがよく頑張ったね」

課長に談話室に呼ばれた望は、深々と礼をした。

「とんでもありません。至らなくて申し訳ありませんでした」

「君には、ご褒美があるよ」

「？」

「君の異動が内定した」

「もしかして、課長もですか!？」

蒼ざめた望に、神山は茶目っ気たっぷりに笑い声をあげた。

「何の話かね。君の事は、かねがね営業部で欲しいと言っていたんだよ」

「私、営業なんて!それに、営業部に女子社員はいません。私はプログラマーには向かないというご判断なのですか？」

神山は、心底おもしろそうだ。

「君は立派に仕事をこなしているじゃないか。そうじゃないよ。営業も出来るSEを育てたいそうだ」

「SE、、、」

「手羅クン、私は君にとうにプログラマー以上の仕事を与えて来たつもりだが？」

「は、はい」

「男子ばかりの営業部に女子が入れば、どんな効果があるか自分で考えなさい。自分を成長させる事も、後輩を育てる事も考えなさい。仕事は山程あるんだぞ。私にもね」

課長がウインクする所を初めて見た、、、。絶句、、、。

\*人生は、恋も仕事も諸々も同時進行ですね。ボロボロであろう望、大丈夫なのでしょうか。

会社に長くいると把握している事が増えるので、雑多な仕事が給料も上がらんに増えますよね～。

## スパイシーな女

---

「奈々子！どうしよう！」

望は、席に戻るなり内線かけた。人目の事は、忘れている。どうせ、お局様みたいな望が何をやっても文句を言える同僚はいなかったし、品がいい社員が多くて、イタズラに厭味を言う者もなかったけれど。

「どうもこうも辞令でしょ？やるしかないわよ」

「女子効果って何？」

「自分で考えろって神山課長がおっしゃるなら、テラちゃんなりの答えでいいのよ」

\*望、パニックですね。目立つのがキライですし、迷惑なのでしょうね。

藤野に小バカにされたと思ったんなら、見返してやれるかも。

結果を出せなきゃ、もっとバカにされるとか、頭の中グルグルでしょうけれど。

麻美は、どんな反応を見せるでしょうか？？？次回！

## 茶道部和室でハンバーガー

---

「やった！！！！フライドポテト当たった！！！！」

麻美は奈々子に腕を突き出して、当たりのスピードくじを見せた。

「そういう所で運を使い果たす女、、、」

「なによ！小さくたって運は運じゃないの！そりゃあ、テラちゃんには負けるけどサァ」

「私、、、飛ばされるって事じゃないのかなあ、、、」

望は、せめて体力つけておくわとダブルバーガーを買ったくせに、ちっとも食べてないな。

「バカバカしい。選りすぐりの営業部に、できない社員入れて貰えるはずないじゃん」

「胃が痛い、、、」

麻美は、えびバーガーのソースを口元から拭った。

「どうして？いいなあ、営業部。皆、背が高くて爽やかで、、、。あ、外出も増えるから、出会いも増えるよ！」

望は何も聞いていないようだ。むやみに、コーラの氷をガラガラさせている。

「女子の先輩もいないし、全くイメージ掴めなくて、、、」

奈々子はイチからジュウまで人に教わろうとするヤツは好かないが、同じ調子を崩さない。

「営業の人達でしょ？仕事の教え方も上手いんじゃない？」

「教育担当は加賀見さんみたい、、、」

麻美は、ハンバーガーよりこっちに食いついた。

「ウソ！フライドポテトと取り替えて！」

\*ああ、また出てしまいました。いい男。でも、藤野や笹木に未練があったら、いい男を見逃しますよ。



## 15分だけお茶しましょう

---

「お疲れ様でした。今日のご挨拶回りは以上です」

加賀見さんは、ビルを出るまでずっと、誰かれなく軽く会釈していた。180cmは越している長身で、鼻筋が通っている。首もちょっと長めだからか、少し前に倒している。今どきなレジメンタルタイ。けど、多分、イタリア物。スーツも。

同じ紺色でも、発色がいいというか、、、。

「15分位お茶に寄りますか？」

「ありがとうございます」

腕時計を見る仕草、スマート、、、。スイス製？いや、値踏みしちゃいけない、いけない。

「やはり、どこでも感触いいですね」

「そうでしょうか。担当者の方達に不安を与えないようにするので精一杯でした。加賀見さんは、先方さんに合わせて随分キャラクターが変わるんですね。あ！すみません、失礼でしたね」

加賀見は笑った。キレイな歯並び。どこからどこまでもサラブレッド。

「これが私の仕事です。手羅さんにも慣れて頂かないと」

「がんばります」

「顧客を増やしたいので、私は安定した先は手羅さんに引き継いで欲しいんです。営業部の連中全員同じ事を狙っていると思います。私は教育担当でツイてました」

落ち着いた声だが、歯ぎれが良くて耳に心地よい。表情も豊か。どうやったら、こういう大人に育つんだろう。

「心配です」

「そんな事、クチにしちゃダメです。私達は、あちこちのシステム部の社員とご一緒しますが、手羅さんと出かけた時に、私の方こそお飾りみたいだと感じる程でしたよ。自信を持って下さい」

「加賀見さんに限ってそんな」

「私の友人の中には、同じ営業でも飛び込み営業の者もいます。私達は親会社の紹介がありますから、私なんてまだまだもいいところですよ」

素敵人って、どうして素敵か分かった気がする。感謝の心と向上心だ。私、ソツは無いけど、それに自分で言うのもあれだけど、十分に頑張り屋だ。でも、頑張っていない人なんていなかったんだ。だから、頑張ってるだけじゃ全然足りない。うっとりしてる場合じゃなかった。加賀見さんと並んで歩いて見劣りしない大人にならなきゃ。

\*麻美が羨むいい男だったみたいですね。

いい男の使命は、たった一人の女を養う事だけじゃないみたいですね。

周囲に良い影響を与える、、、。で、あのいい男（誰???）、どうしたのでしょうか？次回

！

## 煙草のフレイバー

---

「お変わりなかったですか？」

渋谷駅近い地味過ぎな公園に、笹木は出て来てくれた。

「営業部のほうは、いかがですか？」

「皆さん、親切で。やっと慣れて来ました」

「ちょっと失礼していいでしょうか？」

笹木は、ひょいっと煙草の箱を見せた。

「え？いつから？」

「元々です」

自然に笑って火を点けると、旨そうに吸い込んだ。

「3ヶ月間、願掛けで禁煙してたんです」

「うちの社の仕事の為に！？」

「僕自身の為です。倉田さんも平川さんも、僕の事を生意気だっと思ってたと思うんです。僕は自分が大して有能じゃないと分かっていますから、ハッタリかます位積極的にやってるんです。お陰でチーフになりましたけど、お二人が付いて来てくれるか心配だったので、無事に終わるまで煙草を止めますと宣言したんです。目に見える事の方が分かり易いでしょう？僕の覚悟が」

望は、煙草を吸った事が無いので銘柄など分からないけれど、白地に赤いマークの昔からあるデザインのパッケージで、タールやニコチン量が多そうだ。結構、筋金入りの喫煙者だったのだ。

ただの元気な若いチーフじゃなかった。

「私、女子は気楽でいいなって、、、同期の男子から言われちゃったんです。悔しいと感じた自分が情けないです。禁煙が簡単じゃない位は、私にだって分かります」

「何言ってるんですか。緊張でガチガチの僕は、ずっと手羅さんに支えられてましたよ？誇りを持って下さい」

「お電話してみて良かったです。吹っ切れそうです。お忙しいのに、ありがとうございました」

「どうぞ、お近くにいらした時は、また気軽にご連絡下さい。お身体には気をつけて」

「笹木さんも、お仕事頑張ってくださいね」

望は、笹木の後ろ姿を見送っていた。彼は振り向かなかった。季節はいつの間にか変わっていた。

\*男の人達って、スゴいですね。でも、望も彼らに期待されているようです。

何をどう期待されているのか、望は掴むのでしょうか。期待されるのは名誉だと素直に信じて欲しい。

さあ！次回が最終回になるでしょう。

## 社員食堂で乾杯！！

---

「私、マズいかも、、、。一日で一番まともな食事が社食の定食になってる」

奈々子は、サバの味噌煮をつついた。

「たぶん、全員そうよ」

望が、プツと笑うと、麻美が調子に乗る。

「しかも、三人ランチが一番の団欒になってるもんね」

「幸せよ」

望スマイルに目をやりながら、麻美は、舞茸の炊き込みご飯をモグモグやる。ここの社員食堂メニューにはカロリー表示がされていて、500kcalを切る献立も多いが、メタボってる暇がないので、皆あまり気にしていない。

「テラちゃん、今日も外出？」

「いいえ」

「制服は？」

「総務に断ったの」

「テラちゃん、管理職みたい」

「違うわ。いつでも出かけられるようによ」

「ふ〜ん、、、。サマになって来たわね、、、。じゃあ、あの答えも見つけたの？」

「何の話サ??？」

「神山課長からの課題よ。男子だけの営業部に女子が入ったらどんな成果を出せるかって」

「簡単じゃん！場がなごむよ」

「大正解。男子に張り合っていないで、持ちつ持たれつ業績に繋いでいけるといいな」

奈々子は、手にしたお椀の中身がこぼれないようにトレーに置いた。

「張り合ってたんだ？」

「テラちゃん、いい女になったなあ」

奈々子は、お椀の代わりにコップを掴んで捧げた。

「ずっと友達でいようね」

「似合わないセリフ！だけど同感！」

麻美もコップの水を上げた。

望もコップの水を上げる。

そこはかたない笑顔、、、。

\*なんと、あっさりエンディングですが、番外が予定されています。

実在のケン君との対談形式で、わざと書かなかった部分にも触れます。

恋バナや、モテる男、モテる女の条件など、、、。

でも、条件が分かっても、後天的にそういう人になるのは難しいと先にお知らせしておきます。

最後までお付き合い、本当にありがとうございました。

